高知学園短期大学紀要　第48号（2018）：１－13

原　著

実習施設としての保育所の「大学への要望・気づいた点」から検討する指導の在り方

浜田　幸作[1*]，小島　一久[1]，田村　由香[2]

要約：保育実習Ⅰ－１及び保育実習Ⅱにおける実習施設からの要望や意見を取り上げ，分析した結果について考察を加えたものである。研究対象は，保育実習Ⅰ－１及び保育実習Ⅱの実習施設から提出のあった「大学への要望・気づいた点」についての文書のうち，研究に同意を得られた68文書である。保育実習Ⅰ－１の実習に参加した学生は82名，保育実習Ⅱの実習に参加した学生は85名である。KJ 法を用いて，保育実習Ⅰ－１については６つ，保育実習Ⅱについては５つのカテゴリーに分類し，分析を加え本学の実習における課題や問題点を取り上げ，今後の指導や学習内容についての方策を提示した。実習の内容やレベルにおいては，１年生で参加する保育実習Ⅰ－１に対し，２年生で参加する保育実習Ⅱで大きな向上が見られており，大学及び実習施設での協働と連携が成果を挙げていることが実証された。

キーワード：保育実習施設，保育実習指導，実習生への評価，大学への期待，保育実習施設の受け止め方

Ⅰ　はじめに

高知学園短期大学幼児保育学科では，保育士及び幼稚園教諭免許を取得するため，保育実習Ⅰ－１（保育所で２単位），保育実習Ⅰ－２（施設で２単位），保育実習Ⅱ（保育所で２単位），及び教育実習（幼稚園で４単位）を義務付けて実施している。

実習について太田ら[1)]は，「幼稚園や保育所などの保育施設で子どもと生活をともにし，子どもの世界に触れ，保育者の援助を受けながら，保育の実際を経験する機会」である。「学生自身がこれまでの生活や学習で身に付けた知識や技術を〈保育〉に向けて集約し，学びなおしたり，体験を通して理解を深めたりするとともに，それら学んだことを総合的に実践する力を試す機会」でもある。「自身の生き方やあり方を振り返り，仕事への意欲，職業への見通しを持つ機会であり，その適性を確かめる機会」であると述べている。

学生は，実習でこうした機会を得て，多くのことを現場から学ぶことになる。一方受け入れ側の施設でも学生の指導を通して，学生からの刺激を受けていると思われる。実習指導を通して，実習施設は本学での指導の在り方や実習に対する学生の意欲や姿勢，専門知識等々について，様々な意見を抱いている。

実習の教育効果をあげるためには，実習施設との連携が不可欠であるが，指導内容は必ずしも協働関係のもとで行われているとはいえない状況にある。その要因としては，全国保育士養成協議会[2)]によると養成校においての歴史や，教育理念等

[1]高知学園短期大学　幼児保育学科　＊Email: khamada@kochi-gc.ac.jp
[2]たちばな幼稚園

諸々の条件が反映されていることがある，との指摘がある。さらに，実習生を受け入れる実習施設においては，組織的な取り決めや統一的な基準がないことなどをあげ,養成校と実習施設の両者が,実習生の指導や評価の基準などについての価値観を共有するようなあり方が求められている，と提言されている。そうした現状や要請に対し，養成校としての本学が指導内容の見直しや改善を行うことは，極めて重要であり，早急に検討を加えることが肝要である。

本学は，実習に参加した学生を受け入れてくれた施設から，毎回「大学への要望・気づいた点」について，自由記載の所定の文書を受け取り，実習の参考資料としている。この資料を用いて，実習後の懇談会で取りあげて協議を行ってきたところである。

しかし，高知県では人口減少が著しく，また指定保育士養成施設と幼稚園教諭養成課程の両者の認可を受けた学校は２校のみである。定員の合計は90名であるが，そのうち本学は80名を占めている。それゆえ，本学における実習指導の課題を把握することは，高知県全体の保育者養成を発展させるうえで大変意義のあることといえる。そこで，実習現場での指導内容や本学への要望等についての全体像を詳細に把握し直し，分析や検討を加えるために，今回実習施設から本学に求められている保育実習に関する指導内容等について，実習現場の貴重な意見を分析し，本学の指導の在り方について検討することとした。

Ⅱ　研究目的

それぞれの実習施設から提出された本学に対する要望や意見などから，本学が求める幼児教育の実習のねらいや在り方は適切なものであるのか，本学の教育内容や指導の問題及び課題，さらに保育所の受け入れに関する問題や課題などを明らかにすることで，本学の教育内容の見直しや指導体制の改善を図ることを目的とする。

Ⅲ　研究方法

1　研究方法

本学の幼児保育学科の実習は，１年生において９月に２週間の保育実習Ⅰ－１（保育所），翌年２月に１週間の教育実習の研究（幼稚園観察実習を含む）を行い，２年生においては，６月に４週間の幼稚園での教育実習，８月から９月にかけて10日間の保育実習Ⅰ－２(施設)，11月に保育所で２週間の保育実習Ⅱを行っている。

本研究では，平成28年度に１，２年生が実習を行った保育所から提出された「大学への要望・気づいた点」に関する文書を対象として，KJ法を用いて分析し，検討を加えることにした。

なお，本研究は平成29年度高知学園短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て進められた（承認番号第25号)。

2　調査対象

１年次の保育実習Ⅰ－１（２週間）及び２年次の保育実習Ⅱ（２週間）の実習先の施設から提出のあった「大学への要望・気づいた点」についての文書のうち，保育実習Ⅰ－１について，研究同意を得た文書36，保育実習Ⅱについて研究同意を得た32文書である。

なお，保育実習Ⅰ－１の施設は66施設で，この実習施設に参加した学生は82名（うち男子５名)，保育実習Ⅱの施設は，65施設で，この実習施設に参加した学生は85名（うち男子５名）である。

Ⅳ　結果

保育実習Ⅰ－１，保育実習Ⅱに関して，実習終了後に各施設に「本学への要望，気づいた点」について自由記載で求めた。得られた情報をKJ法で分析した。その結果，表１に示したように，保育実習Ⅰ－１に関する内容は６つのカテゴリーに分類され，『実習指導に関する意見･要望』『学習内容への意見』『実習指導体制』『実習態度の評価』『大学への期待･要望』『実習施設としての受け止め方』であった。

保育実習Ⅱに関する内容は，表２に示したよう

に，５つのカテゴリーに分類され，『実習指導に関する意見･要望』『学習内容への意見』『実習生の態度･成長の評価』『大学への期待･要望』『実習施設としての受け止め方』であった。

１　保育実習Ⅰ－１について

１）『実習指導に関する意見・要望』

（１）指導内容の共通理解の必要性

指導内容の共通理解の必要性については，「実習目標や内容を学生と指導職員が共通理解する必要がある」「大学が求める実習内容や変更部分を分かりやすくしてほしい」「実習前に打合せ時間があると良い」「マニュアルなどで指導のポイントを示してほしい」「日誌の書き方の説明書きや例文での指導がほしい」「実習記録の書き方の事前学習を丁寧にしてほしい」「実習生としての実習態度の指導をしておいてほしい」という内容である。指導内容を大学と実習施設が共通理解を深めるための，事前の打ち合わせの重要性が指摘されている。

（２）事前学習の提案

事前学習の提案については，「担当する幼児の事前学習をして臨むと理解しやすい」「実習前に保育ボランティア活動など，子どもと慣れることが良い」「部分実習の指導案が書けるよう事前指導をしておいてほしい」というものである。実習生がスムーズに実習展開ができるための提案がされている。

（３）実習時間

実習時間については，「土曜日半日保育のため８.５時間勤務とした」「休憩時間も実習関連活動をしたので，その分を含めた」というものであり，実習への取り組みの熱心さの一端が窺える。

２）『学習内容への意見』

（１）要求度の高さへの意見

要求度の高さへの意見については，「評価表の知識・技能が１年生には難しいと思われる項目がある」「１年生には子どもの見方など難しいところがある」「２週間で理解するのは難しい項目がある」などの内容であり，評価項目の検討の必要性が示されている（図１参照）。

（２）実習日程への要望

実習日程への要望については，「１年次，２年次と保育園を変えたほうが勉強になるのではないか」「実習日程については10月・２月を避けてほしい」「実習日程については10月～11月が良い」という内容である。

３）『実習指導体制』

訪問指導の評価については，「教職員の訪問により実習についての心配がなかった」「細かい点は訪問した教員に伝えた」「教員を見て，学生が安心していて良かった」「教員の声掛け励ましで学生が喜んでいた」という内容である。

訪問指導は，学生の安心につながっており，指導担当職員との懇談を通して実習施設からの情報も収集できていることが分かる。

４）『実習態度の評価』

（１）実習態度の良い評価

実習態度の評価については，「子どもたちへの言葉遣い，話しかけ，接し方など気持ちの良いものだった」「身だしなみ，挨拶，態度など良く指導ができている」「礼儀正しく，学びたい姿勢が見られ気持ちよく指導できた」「まじめに意欲をもって取り組んでいた」「適性の高い学生が実習に来て熱心だった」など高評価となっている。

初めての実習ということもあり，学生に周知を図っている「実習心得」が役立っているものと思われる。

（２）実習態度の課題

実習態度の課題として「子どもの前で保育士として動いてほしい」「実習生同士の緊張感が乏しく，自ら考えて行動できない場面があった」という厳しい指摘もあった。きちんと対応できている学生がいる一方，厳しい指摘もあり，実習に臨む心構えを持たせることに課題が残っていることが窺える。

5）『大学への期待・要望』

（1）人材育成への期待

人材育成については，「慢性的な人手不足の中，保育士育成に感謝する」「卒業後，保育士・幼稚園教諭として活躍できる人材育成に期待する」「たくましく意欲のある人材の育成をお願いする」「卒業後の受け入れをしていきたい」「卒業生が明るく意欲的に活躍している」「地元出身の実習生が地元に戻ってきている」「来年，成長した学生に会えるのを楽しみにしている」「地元出身実習生が地元に戻ってきている」など，本学に対する大きな期待の内容であった。

（2）就職への期待

就職への期待については，「資格を習得した学生が現場に就職してほしい」「現在保育士不足状態であり，卒業後保育士として働くよう指導してほしい」「保育士募集時期や臨時雇用について学生に周知してほしい」などの要望である。

保育現場での人手不足が深刻な中，本学が果たしている役割の大きさが評価されているが，その役割の重要性を踏まえた指導が大事であるということの提起であると捉えられる。

6）『実習施設としての受け止め方』

（1）実習施設の受け入れ方

実習施設の受け入れ方については，「2年後には共に働く仲間になってほしいという思い」「現場の大変なことも沢山ある喜びも伝えていきたい」「初めての実習受け入れで大変勉強になった」「実習園になり感謝している」などの内容である。共に働く仲間になってほしいという思いから，熱心な指導が行われていることが窺える。

（2）実習施設の状況

実習施設の状況については，「受け入れ態勢が不十分だった。十分指導ができなかった」「行事が重なり，普段の保育を経験させることができなかった」「日々の保育の中で，実習記録表へのアドバイスが不十分になった」「行事など多忙で，担任保育士との協議も不十分になった」「就職してもらえるよう，体制作りに力を入れたい」などの内容である。実習施設には，それぞれの施設の事情があり，十分な指導体制のもとで，満足いく対応とはならなかった点にも触れている。実習施設が実習を前向きで好意的に受け止め，真摯に実習生に接しているのが窺える。

表1　保育実習Ⅰ－1

カテゴリー	サブカテゴリー	内　　容
実習指導に関する意見・要望	指導内容の共通理解の必要性	実習目標や内容を学生と指導職員が共通理解する必要がある
		大学が求める実習内容や変更部分を分かりやすくしてほしい
		実習前に打ち合わせ時間があると良い
		マニュアルなどで指導のポイントを示してほしい
		日誌の書き方の説明書きや例文での指導がほしい
		実習記録の書き方の事前学習を丁寧にしておいてほしい
		実習生としての実習態度の指導をしておいてほしい
	事前学習への提案	担当する年齢の幼児について事前学習をして臨むと理解しやすい
		実習前に保育ボランティア活動など，子どもに慣れることが良い
		部分実習の指導案が書けるように事前指導をしておいてほしい
	実習時間について	土曜日，半日保育のため8.5時間勤務とした
		休憩時間も実習関連活動をしたので，その分を含めた
学習内容への意見	要求度の高さへの意見	評価表の知識・技能が1年生には難しいと思われる項目がある
		1年生には子どもの見方など難しいところがある
		2週間で理解するのは難しい項目がある

	実習日程への要望	１年次，２年次と保育園を変えたほうが勉強になるのではないか
		実習日程について10月・２月を避けてほしい
		実習日程について10月から11月が良い
実習指導体制	訪問指導の評価	教職員の訪問があり実習についての心配がなかった
		細かい点は訪問した教員に伝えた
		教員を見て学生が安心したり声がけ励ましで喜んでいた
実習態度の評価	実習態度の良い評価	子どもたちへの言葉遣い，話しかけ，接し方など気持ちの良いものだった
		身だしなみ，挨拶，態度などよく指導ができている
		礼儀正しく，学びたい姿勢が見られ気持ちよく指導ができた
		まじめに意欲を持って取り組んでいた
		適性の高い学生が実習に来て熱心だった
	実習態度の課題	子どもの前では保育士として動いてほしい
		実習生同士が緊張感が乏しく，自ら考えて行動できない場面があった
大学への期待・要望	人材育成への期待	慢性的な人手不足の中，保育士育成に感謝する
		卒業後，保育士・幼稚園教諭として活躍できる人材育成に期待する
		たくましく意欲のある人材の育成をお願いする
		卒業後の受け入れをしていきたい
		卒業生が，明るく意欲的に活躍している
		来年，成長した学生に会えるのを楽しみにしている
		地元出身の実習生が地元に戻ってきている
	就職への期待	資格を修得した学生が現場に就職してほしい
		現在保育士不足状態であり，卒業後保育士として働くよう指導してほしい
		保育士募集時期や臨時雇用について学生に周知してほしい
実習施設としての受け止め方	実習施設の受け入れ方	２年後には共に働く仲間になってほしいという思い
		現場の大変なことも沢山ある喜びも伝えていきたい
		初めての実習受け入れで大変勉強になった
		実習園になって感謝している
	実習施設の状況	受け入れ態勢が不十分だった，十分指導ができなかった
		行事が重なり，普段の保育を経験させることができなかった
		日々の保育の中で，実習記録表へのアドバイスが不十分になった
		行事など多忙で，担任保育士との協議も不十分になった
		就職してもらえるよう，体制作りに力を入れたい

２　保育実習Ⅱについて

１）『実習指導に関する意見・要望』

（１）指導内容の共通理解の必要性

指導内容の共通理解の必要性については，「日誌の基本的な書き方や言葉の使い方を身につけてきてほしい」という内容である。

保育実習Ⅰ－１に見られた指導内容の事前打ち合わせの必要性などは無くなっているが，実習態度に課題がある学生の存在が示されている。

（２）事前学習への評価

事前学習への評価では，「授業で子どもを観察する目がしっかりできている」「学生への指導が行き届いている」「全てにおいて優秀だ」と良い評価が示された。

保育実習Ⅰ－１では「事前学習の提案」というサブカテゴリーがあったが，そうした内容がなくなり，本学に対する良い評価になっている。

2）『学習内容への意見』

（1）実習日程の要望

実習日程については，「11月は行事が多く，他の時期にしてほしい」という施設側の状況による内容が示されている。

3）『実習態度・成長の評価』

（1）意欲・態度の評価

意欲・態度の評価に関しては，「挨拶ができてマナー教育ができている」「礼儀正しく明るい笑顔で臨んでいた，好印象だった」「挨拶や礼儀正しい振る舞い，はっきりした受け答えなど態度が好ましかった」「誠実に実習していて感じの良い実習態度だった」「保育士になる思いを持って実習していた」「まじめな態度で実習に意欲を持って取り組んでいた」「朝の受け入れ時や混合保育にも率先して関わり意欲的に実習をしていた」「子どもと触れ合いながらの実習でよかった」「若者らしく活発で，計画準備をして子どもと向き合っていた」「子どもたちに親しまれて一緒に遊び人気者だった」「保育後冷静に評価し指導保育士の助言にも耳を傾けていた」「保育者としての適性に優れた学生だ」「幼少期に愛され大事に育ったことが分かる素直で明るい人柄を感じた」などの内容である。

実習施設からは，挨拶・礼儀等のマナーが良い，笑顔・誠実・真面目・素直・意欲的，率先・活発などのプラス評価を受けている。また，計画や準備，子どもと親しいふれあいなど子どもと向き合って取り組んでいたことや指導担当者の助言をしっかり受け止めることもできていることが窺える。

（2）成長の評価

成長の評価では，「２年続けての実習で学生の成長が見られ，うれしかった」「１年間の成長を感じた」「保育実習Ⅰ･Ⅱを終えて学生と園児の成長を見られることはメリットだ」というものである。

保育実習Ⅰ－１で，「来年，成長した学生に会えるのを楽しみにしている」という内容に見られるように，２年生になって同じ実習施設で実習をしたことで「２年続けての実習で学生の成長が見られ，うれしかった」など，２年続けることによって成長の姿が見られるというメリットとして受け止めていることが分かる。

4）『大学への期待・要望』

（1）人材育成への期待

人材育成への期待については，「本県の保育所・幼稚園等のための人材育成に感謝している」「学生を社会へ送りだす最終学校として，多くの取り組みを期待している」「子ども支援だけでなく地域対応，親支援など保育士の役割は多様になっている」「いろいろな経験を学生時から多くしておくことが大事」「どんな時も冷静に考え行動できる人材が必要になっている」「職員集団のなかで協調性を持ち，コミュニケーション能力が必要」「保育はチーム仕事で，協調性や社会人として基本的なことやルールを学ぶことが大事」「現場の厳しさに共に対応していく意欲や素直な人材，たくましさが必要」「大学と保育所が共に保育の楽しさ尊さを伝え，保育士を増やしていきたい」というものである。本学への期待の高さが分かる。

（2）就職への期待

就職への期待については，「地元に就職してほしい」「保育士不足の折，仲間になってくれる人が増えてほしい」「一緒に保育ができたら良いなと思う学生たちだった」「保育士として働く意識があり，目的を持って保育に参加していた」「実習と現実の差については，職場の仲間として共に頑張りたい気持ちだ」「保育士募集時期や臨時募集について学生に知らせてほしい」などというものである。現実の人材不足解消のため，本学への期待と役割の重要度が分かる。

5）『実習施設としての受け止め方』

（1）実習施設の受け入れ方

「実習生の保育を通して学ぶことが多くあった」という内容である。実習施設が実習生の保育からも，学ぶという積極的な姿勢で対応していること

が窺える。

（2）実習施設の状況

実習施設の状況については,「指導が不十分だった」「事務的な時間が取れず返信が遅れた」「多忙のため実習生の様子が殆ど見られず，担任と協議して評価した」などの内容である。実習施設に負担をかけている状況が窺える。

（3）実習施設の自己評価

実習施設の自己評価については，「小規模でしか経験できない実習で，充実したものになったと思う」「行事が多い時期だったがいろんな面が見られて勉強になったという感想を得た」という内容である。

実習施設には，規模の大きい施設から規模の小さい施設まで様々あり，それぞれの特色や支援体制等がある。その施設の実態に応じた良さを体験することができている。また，11月という時期には行事も多く，そうした行事を体験できていることが示されている。

表2　保育実習Ⅱ

カテゴリー	サブカテゴリー	内　　容
実習指導に関する意見・要望	指導内容の共通理解の必要性	日誌の基本的な書き方や言葉の使い方を身につけてきてほしい
	事前学習への評価	授業で子どもを観察する目がしっかりできている
		学生への指導が行き届いている
		全てにおいて優秀だ
学習内容への意見	実習日程の要望	11月は行事が多く，他の時期にしてほしい
実習生の態度・成長の評価	意欲・態度の評価	挨拶ができてマナー教育ができている
		礼儀正しく明るい笑顔で臨んでいた，好印象だった
		挨拶や礼儀正しい振る舞い，はっきりした受け答えなど態度が好ましかった
		誠実に実習していて感じの良い実習態度だった
		保育士になる思いを持って実習していた
		まじめな態度で実習に意欲を持って取り組んでいた
		朝の受け入れ時や混合保育にも率先して関わり意欲的に実習をしていた
		子どもと触れ合いながらの実習でよかった
		若者らしく活発で，計画準備をして子どもと向き合っていた
		子どもたちに親しまれて一緒に遊び人気者だった
		保育後冷静に評価し指導保育士の助言にも耳を傾けていた
		保育者としての適性に優れた学生だ
		幼少期に愛され大事に育ったことが分かる素直で明るい人柄を感じた
	成長の評価	２年続けての実習で学生の成長が見られ，うれしかった
		１年間の成長を感じた
		保育実習Ⅰ・Ⅱを終えて学生と園児の成長を見られることはメリットだ
大学への期待･要望	人材育成への期待	本県の保育所・幼稚園等のための人材育成に感謝している
		学生を社会へ送りだす最終学校として，多くの取り組みを期待している
		子ども支援だけでなく地域対応，親支援など保育士の役割は多様になっている
		いろいろな経験を学生時から多くしておくことが大事

		どんな時も冷静に考え行動できる人材が必要になっている
		職員集団のなかで協調性を持ち，コミュニケーション能力が必要
		保育はチーム仕事で，協調性や社会人として基本的なことやルールを学ぶことが大事
		現場の厳しさに共に対応していく意欲や素直な人材，たくましさが必要
		大学と保育所が共に保育の楽しさ尊さを伝え，保育士を増やしていきたい
	就職への期待	地元に就職してほしい
		保育士不足の折，仲間になってくれる人が増えてほしい
		一緒に保育ができたら良いなと思う学生たちだった
		保育士として働く意識があり，目的を持って保育に参加していた
		実習と現実の差については，職場の仲間として共に頑張りたい気持ちだ
		保育士募集時期や臨時募集について学生に知らせてほしい
実習施設としての受け止め方	実習施設の受け入れ方	実習生の保育を通して学ぶことが多くあった
	実習施設の状況	指導が不十分だった
		事務的な時間が取れず返信が遅れた
		多忙のため実習生の様子が殆ど見られず，担任と協議して評価した
	実習施設の自己評価	小規模でしか経験できない実習で，充実したものになったと思う
		行事が多い時期だったがいろんな面が見られて勉強になったという感想を得た

Ⅴ　考察

本研究では，日頃の実習施設の熱心な指導の様子や，懇談会での忌憚のない意見交換から得られていた施設側の学生への対応の成果や，本学の保育士養成への期待が再確認できた。

特筆すべきことは，調査対象とした要望には，高知県が抱える保育へのニーズと近年の保育士確保の困難さを反映されている点である。すなわち，本学としての課題を考えるために不可欠な資料を得ることができたといえる。

ここでは大学が保育実習に関して工夫･検討･実践する必要性がある事項と，実習施設に理解・協力を求める協働体制の強化する事項に関して考察する。

1　実習による学生の段階的成長について

今回の研究結果から，保育実習Ⅰ－１及び保育実習Ⅱにおける学生の学びの状態は，その内容やレベルにおいて違いが見られた。

山田ら[3)]は，実習に学ぶ前と後の違いを次のように述べている。「実習に参加する前は，肝心の子どもについてのイメージが乏しいために，保育活動の進め方や環境構成が考えにくい。実習で子どもと生活をともにすることで，子どもの興味や行動の特徴がつかめてくると，保育計画や保育方法が具体的に考えられるようになる」と指摘している。

しかし，初めての保育実習で学生は，子どもと生活を共にしながら，子どもの興味や行動の特徴をつかみ，保育計画や保育方法を具体的に考えて行動できるまで到達することは難しい面がある。

１年次の保育実習Ⅰ－１は，入学後５カ月という短い学習期間を終えた段階で，実習に入る。そのため学習内容や保育者としての職業意識面などにおいても深化には至っておらず，何をどうすべきか戸惑いや不安という感情が強く見られる。そうした未熟さがマナーや子どもへの対応等に関して実習時の状態として表れていると思われる。

それに対して２年次の保育実習Ⅱで良い評価がされる背景には段階的な実習の経験があると考える。この保育実習Ⅱは１年次の保育実習Ⅰ－１(90時間）と幼稚園の観察実習(45時間)を体験し，さらに２年次の施設実習(90時間)と教育実習(180時間)の実習を経た最後の実習である。段階的に各実習を経ていることから，学生の実習に対する意識の高まりがあり，一定の経験を積んできた余裕や知識と技術の向上が見られる。それが，大きな成長につながっていると思われる。

実習施設からの評価は，殊に保育実習Ⅱにおいて，高い評価となっており，学生に対し，保育者としての適性に優れているなどという評価もある。このことは，本学のポリシーである，「専門的職業人として，社会に貢献できる人材の養成」ということが，学生に意識として浸透してきている証左ではないだろうか。

また，幼児保育学科の「保育者の資質能力の育成」に力点を置いた指導が功を奏してきている結果だともいえるのではないかと思われる。

他方，１年生においては保育士としての意識や行動において不十分だという指摘がある。これについては，事後指導における授業や個別面接などによって，学生の意識改革を図る必要がある。

学生は実習の段階を踏みながら，一つ一つ自分の知識・技術を獲得するのであり，教員は担当の科目の授業を通して，保育士の役割や子ども理解等について確かな認識をさせて，自覚させていくことである。意欲や態度の醸成については，徹底して指導することであり，努力を継続していく必要があると考える。

成長の評価の視点として，両実習を同じ施設で継続する意義が挙げられている。２年間同じ施設で実習することで，幼児の発達段階を実際の目で確認することができるのである。その上で子どもの個性の発達に応じた支援に生かす知識になることから，有効な方法であると考えている。また，学生からは，２年続きで同じ施設で実習をすることで，成長した幼児の変化に気付き発達段階の学習になったとか，幼児も実習生を覚えていて，親近感がわき支援がしやすかったという声も多く聞かれている現状にある。

２　実習内容に関する共通理解の必要性と方策について

保育実習Ⅰ－１で指摘のあった実習目標や内容については,「分かりやすい文面」にすることや「実習記録の書き方の指導」「実習生としての実習態度の指導」などは，直ちに改善できる点である。

一方,「実習前の打合せ時間」の確保や「日誌の書き方の説明書きや例文」など, 実習の「マニュアル」作成の要望については，実習のねらい（①子どもたちの園での活動を知る　②保育士の子どもへの対応，保護者への働きかけを知る　③施設の環境を知るなど）や内容を示した実習要項を作成し，実習施設の指導のばらつきをなくすことが大事である。

保育実習Ⅰ－１で指摘があったように，１年生は，入学後５カ月での実習のため，難しい評価項目が並んでいるが，１年生で保育所の理解についてしっかり認識を深めてもらいたいというねらいがあり，こうした評価項目になっていることを，実習施設に理解を求めていく必要がある。

評価項目においては，本学では図１のように態度及び知識・技能を求めており，知識・技能の項目には，保育所の理解として１日の流れの理解，乳幼児発達の理解，保育計画・指導計画の理解，保育技術の習得，乳幼児との関わり，健康・安全への配慮の６項目を挙げている。因みに，２年生になると図２のように，知識・技能の項目は知識・援助指導の項目に変わり，保育技術の展開として，一人一人の子どもへの対応，子供の最善の利益，保育計画立案と実施，記録，保育士の職業倫理，自己課題の明確化というように，ステップアップした評価内容になっており，実習でさらなる深まりを期待しているところである。

また，実習にあたって実習施設に依頼文書を送付する際，本学の指導方針等のガイドラインを同封して周知を図ることは，今後の取り組みとしては大切な改善ポイントと思われる。その場合，ガ

保育実習Ⅰ-1（保育所）評価表

平成29年度　高知学園短期大学　幼児保育学科

実習生	第1学年	学籍番号	氏　名	
項　目	評価の内容		評価段階 適当な段階に○印をご記入下さい	所　見
態　度	意欲・積極性 責任感 協調性 環境整備 生活習慣		秀　優　良　可　不可	
知識・技能	保育所の理解 一日の流れの理解 乳幼児の発達の理解 保育計画・指導計画の理解 保育技術の習得 乳幼児とのかかわり 健康・安全への配慮		秀　優　良　可　不可	
実習期間	自　平成　年　月　日 至　平成　年　月　日		出席日数　日 欠席日数　日	遅刻回数　回 早退回数　回
総合評価	秀　優　良　可　不可		※　○印をご記入下さい	
総合所見	記入者氏名			

上記の通り評価します

平成　年　月　日

実習園名

園長名　印

指導者名　印

備考：評価の基準は次の通りです

秀（非常に優れている）　優（優れている）　良（適切である）　可（努力を要する）　不可（成果が認められない）

図１．保育実習Ⅰ―１（保育所）評価表

保育実習Ⅱ（保育所）評価表

平成２９年度　高知学園短期大学　幼児保育学科

実習生	第2学年	学籍番号	氏　名	
項　目	評価の内容		評価段階 適当な段階に○印をご記入下さい	所　見
態　度	意欲・積極性 責任感 探究心 協調性		秀　優　良　可　不可	
知識・援助技術	保育技術の展開 一人一人の子どもへの対応 子どもの最善の利益 保育計画立案と実施 記録 保育士の職業倫理 自己課題の明確化		秀　優　良　可　不可	
実習期間	自　平成　年　月　日 至　平成　年　月　日		出席日数　日 欠席日数　日	遅刻回数　回 早退回数　回
総合評価	秀　優　良　可　不可		※　○印をご記入下さい	
総合所見	記入者氏名			

上記の通り評価します

平成　年　月　日

実習施設名

施設長名　印

指導者名　印

備考：評価の基準は次の通りです

秀（非常に優れている）　優（優れている）　良（適切である）　可（努力を要する）　不可（成果が認められない）

図２．保育実習Ⅱ（保育所）評価表

イドラインの作成は，本学幼児教育学科教員の共通認識が大事であり，検討会議を設置して，十分に練りあげる必要がある。

保育実習Ⅱにおいては，保育実習Ⅰ－１に見られたような要望や意見が，激減しているが，まだ十分な認識に至っていない学生も一部存在しており，そうした学生を出さないためにも保育実習指導ⅠⅡ，保育指導法，保育内容総論ⅠⅡ，保育内容，乳児保育ⅠⅡ，保育相談支援等々実習関係の授業を通して指導の徹底を図る必要がある。

実習施設と本学との関係は，訪問指導においても概ね良好である。訪問指導については，全国保育士養成協議会[4]は，学生が実習を実施している時間に，実施している場所で，教員が直接指導し，養成校と実習施設が連携と協働を実践する機会であり，指導担当職員との懇談を通して実習施設についての情報収集や養成校としての教育・実習目標，方法の説明など諸事情の協議を行い，実習や要請について実習施設と連携を図る機会になっている，と述べている。また，「…実習生にとっても養成校の教員と実習期間中に会うことで，不安や緊張がほぐれてやる気につながる」というコメントもある。そのように本学でも訪問指導は，学生の安心にもつながっており，極めて有効に作用している。実習先への訪問指導時には，施設長及び実習担当者に本学の方針等の周知を図ることは，実習生指導上大切なことと思われる。

実習後に開催する懇談会では，実習指導に関する意見や要望，学習内容への意見，実習指導体制などを協議事項として取りあげているが，その議事録の内容を懇談会出席施設のみならず，全実習施設へ送付することは，連携強化や協働体制上大事なことではないだろうか。

3　事前学習について

保育実習Ⅰ－１においては，事前学習の提案として，指導案が書けることが求められている。また実習記録や日誌の書き方についても事前学習が求められている。初めての実習に出るにあたって，学生の不安や緊張を少しでも少なくするために，

事前に徹底した指導をすることは，効果的な実習成果を得るうえで重要なことである。各教員が授業において徹底していかなければならない。

また学生がスムーズに実習を展開するためのアイディアとして「幼児に関する事前学習をさせること」や「実習前に保育ボランティア活動に参加すること」があった。しかし，残念ながら本学においては２年間，極めてハードな時間割が組まれており，スケジュール的には厳しい現状がある。今後，検討を要する課題であると考える。

4　実習施設との協働体制の強化について

実習施設との協働体制の強化を図るためには，施設側の事情を考慮する必要がある。そこで，施設の受け入れについては，無理のない範囲内での受け入れをお願いするなど，施設の実態を考慮しながら人数等も含めて実習先の決定を図る必要がある。

一方，大学が施設側に理解を求めなければならないこともある。実習は，昼休みや休憩時間を除き90時間の確保が必要であり，週５日で10日間の勤務とすれば，１日９時間半～10時間の在園時間が必要となる。このことは，実習施設に十分な理解を得ておく必要がある。

また，保育実習Ⅰ－１及び保育実習Ⅱで，実習施設から実習日程に関する要望が出されているが，それぞれの実習施設には，それぞれに異なった事情があり，本学においてもカリキュラムや就職の時期等を考慮すると，現状では日程の変更は厳しい状況にある。

実習施設が本学に対する期待については，極めて大きいものがある。保育所には，保護者に代わって子どもを保育するという使命があるが，さらに地域対応や親支援などその役割は増大してきている。こうしたことに対応するためには，職員集団としてのチームワークやコミュニケーション能力も極めて大事になってきており，基本的な知識やマナーのみならず，思考し判断し，推理して実行できる力量が必要となる。

佐藤[5]は，保育士に求められる資質として，①健康，②明るく素直，③行動力，④前向きな取組，⑤清潔感，⑥気配り，⑦他者とのチームワーク，⑧声，⑨真面目さを挙げている。そのような資質や能力を備えた保育士を本学は養成する必要があり，それが施設側の大いなる期待となっている。そこで，このことを踏まえた指導が重要となっている。指導の在り方については，常に改善を加え，授業やオリエンテーション，実習等を通して本学と実習施設の連携のもと実施していく必要がある。

新井ら[6]は，保育者を目指す学生が養成校で学ぶ必要なものとして，「保育実践の理論的基礎となる心理・保育・福祉系のいわゆる原理系科目の充実と，独習や短期間での修得が難しいピアノや声楽などの実技の充実，一般教養科目，保育実践能力の育成」を挙げている。また「保育者には，幅広い知識や技能が求められているが，その中心は，眼の前の子ども一人一人をどのように捉え，理解し，どのような見通しのもとでどう援助するかにある。そのような専門性が育つような基礎を確実に培う必要がある」とも述べている。この内容は極めて重要な指導内容であり，学内で取り組むべき教科科目とも照合しながら，指導の具体項目を拾いあげ，検討会議で十分な検討を重ねて，指導や方策等の改善を図っていくことが求められている。

一方，学生は学内で学んだ知識や技術を保育所実習の場で，実際の保育活動の中に活用できることが求められており，一人一人の子どもの成長状態と個性を理解し，保育士として関わるという専門的な判断と行動が求められている。その実践的な学びの場での学習には現場の保育士の教育的関わりが極めて重要なポイントである。

実習施設では，業務が多忙ゆえに指導の不十分さを挙げているが，実際はどの実習施設も人手不足の中，指導案や日案，週案などの指導計画に目を通し，学生へのアドバイスなど丁寧なコメントが記載され，細やかな指導を真摯に行っている。そうした中で，お互いに刺激しあいながら教育効果をあげているという側面もみられる。実習施設

の真摯な指導に応えるためは，学生自身が実習施設の職員や関係者に対する，誠意と配慮のある行動がとれるように，自覚と認識を深める教育的関わりを大事にする必要がある。

実習施設の保育園は，まさに保育士を育てる教育の場なのである。当然，教育方針や教育内容や教育方法は，大学と実習施設が前述したように実習に関する内容を共通理解する努力をすることによって，協働体制ができて効果的な実習が実施でき，期待される人材が育成されると考える。

謝辞

本研究にご協力いただきました実習施設の皆様に心からお礼を申しあげます。また，高知学園短期大学梶本市子参与には，ご助言をいただき深く感謝します。

引用・参考文献

1）太田光洋（編），幼稚園・保育所・施設実習完全ガイド，京都，ミネルヴァ書房，2015，2-293

2）全国保育士養成協議会（編），保育実習指導のミニマムスタンダード，京都，北大路書房，2007，2-165

3）山田敦子・角田道代・今井靖親，短大生の「実習」に関する一研究Ⅰ．保育実習，*奈良文化女子短期大学紀要*，2005，36，89-98

4）全国保育士養成協議会『前掲書』　58-59

5）佐藤綾，修紅短期大学幼児教育学科の保育実習についての研究(平成16年度～18年度)，*修紅短期大学紀要*，2007，28，1-11

6）新井美保子・林陽子・中村治人，保育者養成課程に求められる教育内容の検討，*岡崎女子短期大学研究紀要*，2004，37，1-13

受付日：平成29年10月27日

受理日：平成29年12月25日

Bulletin of Kochi Gakuen College, No. 48 (2018) : pp.1-13

Original Paper

The Ideal Measures of Practical Training Guidance Examined by "Demands for the College and Points Realized" by the Childcare Practical Training Facilities

Kosaku HAMADA[1*], Kazuhisa OJIMA[1] and Yuka TAMURA[2]

Abstract: This research is that by collecting and analyzing demands and opinions from the childcare practical training facilities which took charge of "Childcare Practical Training Ⅰ-1" and "Childcare Practical Training Ⅱ-1", we consider the result of this analysis. The subject of research is 68 documents which were permitted to use for this research among all the documents about "demands for the college and points realized by the practical training facilities", submitted by these facilities which took charge of "Childcare Practical Training Ⅰ-1" and "Childcare Practical Training Ⅱ-1". 82 students participated in the practical training called "Childcare Practical Training Ⅰ-1" and 85 students participated in the practical training called "Childcare Practical Training Ⅱ". Based on the KJ method, the documents were classified into six categories as for "Childcare Practical Training Ⅰ-1" and five categories as for "Childcare Practical Training Ⅱ-1". We analyzed them, examined the challenges and problems as to practical training of our college, and presented the measures on practical training guidance and learning content in future. The content and level of practical training were greatly improved in "Childcare Practical Training Ⅱ-1", which second year students in the college took part in, compared with "Childcare Practical Training Ⅰ-1", which first year students in the college took part in. This demonstrated that the results were produced from working together and cooperation between the college and the training facilities.

Key words: childcare training facility, childcare practical training guidance, evaluation of trainee, expectation of college, perception by childcare training facility

[1] Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education and Care, *Email: khamada@kochi-gc.ac.jp

[2] Tachibana Kindergarten